

## どーなっつ・れぽーと

2月もようやく終わり、つていう土曜日。お休みだったんだけど、あたしは学校に来ていた。

特になにする、つてわけじゃないのよ。でもここ数日、ココさまの様子がちょっとヘンで。今日もお仕事ないはずなのに出勤されたから、なんだか来たくなっちゃって。今日は学食もお休みだつていうのにね。

「はあ、どつなざつたのかしら、ココさま

「ねえねえ、くるみ」

「んー、なによいったい」

そんなこと考えながら、テラスの席で上向いてた目を開けたら、

「べーっ♡」

目の前に、大きななにか。紫っぽい色して、うねうね動く

「はあ!？」

思わずがばつと起き上がった先に、耳のような髪した子がいた。口を大きく開けて、色が変わった舌を出した——のぞみが。

「ほらほら、舌がむらさきでしょ？ おタカさん新作の、ブルーベリーアメだつて」

「まったく、この子はっつ！」

「ほらー。くるみ色」

「あんたは小学生かっ！ もつすぐ卒業でしょう？ しっかりしなさいよ！」

ん？

思いつきり言つてやったから、てつきり言い返してくると思つてたのに、なにもこない？

「やっぱ、しっかりしてない、よね。あたし」

ぼつん、つてちつちやな声に、思わずあたしは寒気がした。

「ちよ、ちよつと。どしたの、のぞみ？」

よく見たら、顔はふざけてるくせに目がすこし沈

「んでるじゃない。なにが あ、まさか卒業したくないとか？」

「卒業って言ったって、あんたの場合は高等部になるだけじゃない？ そりゃあ、クラス替えはあるでしょうけど、りんだっていっしょなんだし」

「でも、あたしに聞こえてきたのは予想と違う言葉だった。」

「最近、ココがね　なのに、わたしにはほとんど相談してくれないんだあ。しっかりしてないからかなあ　って、くるみ!?!」

「言われた瞬間、あたしは立ち上がった。ヘンだとは思ってたけど、まさか、のぞみが気づくくらいだなんて。」

「ちょっと、ココさま探してくるわ。確かめなくっちゃー!」

「ちがうの、そうじゃなくて　!」

「?」  
上着を引っ張られて足をとめたあたしに、のぞみ

の音が響いてきた。

「なんかね、自分のこと　パルミエ王国のこと、理事長先生に話したんだって」

\*\*\*\*\*

パタパタパタ

軽い音たてて、車が進んでく。

パタツ、パタパタ

ときどき止まったりもしながら　速くはないけど、こんなのもいいな。

「わたしが乗っているのは、いつもの、ドーナツ屋さん。となりで運転してるのはもちろん、かおるちゃん。」

「結構揺れるでしょ。大丈夫、ブキ嬢ちゃん?」  
わたしが笑って答えたら、ずれたサングラスをちよっ

となおして、また走り始めた。

——ブキ嬢ちゃん、か。

この呼び方も割とすぐ慣れちゃったなあ。昔から友達にはずーっと『ブッキー』って呼ばれてたせいかな？

ラブちゃんたちのことは今でも『お嬢ちゃん』って呼ぶし、わたしがラブちゃんたちと一緒にの時もやっぱり『お嬢ちゃん』。わたしとかあるちゃん、ふたりのときだけ『ブキ嬢ちゃん』だから、最初はちよつと恥ずかしかつたんだけど。

それにしても　きのうは、びつくりしたなあ。

いつもいる公園からこの車がちよこつと消えちゃうのは、よくあることなんだけど、4日も続けて消えちゃったから心配してたのに　きのう公園に行ったらいきなり現れて、『あした、ドーナツ売るの手伝ってくれない？』だもんね。

でも、なんでわたしなんだろ？　公園にはラブちゃ

んたちと行ったのに、わざわざ別れてから現れた感じだったけど

「お、見えてきた見えてきた。あそこだよ、ブキ嬢ちゃん」

かおるちゃんがさした指の先には、おっきな十字架。ちよつと、わたしの学校みたいな建物　あ、看板があるわ。

「聖　『聖ルミエール学園』。ここ？」

「そうそう。ええとねえ　まいど、ドーナツ屋です。学食のヘルプでね、通りますよ」

車の窓を開けて、学園の入り口にある警備の人に声をかけてから、また車が走り出した。

学園の周りを巡っている、車用の通路をゆつくり登って、建物の近くまで　わぁ

「テラス？　これ、ひよつとして、カフェかなあ？」

隣を見たわたしの前で、かおるちゃんが頷いている。そっかあ、カフェつきの食堂なんだ。わたしの学校も割と設備がいいと思ってたけど、上には上がある

ものなんだなあ。

「女子校でお店開くんだ。女の子ばかりだから、かおるちゃん見たら逃げ出しちゃうかもね」

「いやあ、そんなことはないよ。先生と学食のバイトに男の子がいるからねえ　あ、でもどっちもかわいい子だから、やっぱり驚いちゃうか。くは」

「おとこのこ？」

「そっか、そういう女子校もあるんだ。わたしの学校は警備員さんまで女性だから、考えてなかったな。」

「よし、じゃここに車停めて、と　あ、そうそう、その男の子たちなんだけどねえ、実はさ」

「その次の言葉を聞いて、わたしは一瞬、目が点になった。」

「けど、それが頭の中に染みてきてから、納得したの。」

「ああ、だからわたしなのなあ、って。」

\*\*\*\*\*

人はぼつぼついるだけ。いつもの学食のテラスだけど、やっぱり違って見えるよな。

そんな風に思いながら、オレが学食のキッチンからホウキ持ってテラスに出たとき、背中から声が聞こえてきた。

「あれ、シロップ。なにやってるんだい？」

俺はそのまま学食のまわりをホウキで掃き続けた。顔を上げる必要なんてねえ。こりゃココの声だ。

「見てわかんदार。掃除だよ、掃除」

「へえ。今日は学食は休みだって聞いたから、てっきりシロップも休みかと思ってたよ」

「なんかいつもよりもここにこしてるように見えるぞ。なにかやったんじゃないだろうな？」

「店長はなんか用事らしくてさ、でもヘルプ呼んだから、ゴミ箱とテラスは片付けといってくれってん？」

あれ、なんか変な気がするぞ。なにが シロツ  
ブだとお!?

「こら、ココ タ先生! 学園じゃその呼び名は  
ダメだろうが。のぞみたちならともかく、お前がそ  
れでどうすんだよ!」

「ああ そうだね。でも、もう隠さなくてもいい  
かもしれないんだ。理事長にね、言ったんだよ。僕  
がパルミエ王国の者だつて」

あつ、ちゃあ

「なんだつて、そんな」

口ではそう言ったけど、俺にもなんとなくわかっ  
た。ココが自分から言うわけないんだから、

「故郷に帰るのを、理事長に引きとめられちゃつてね」

仕方ない話だつたんだろつとは思つよ。そりゃあな

「教え方がうまいから、ぜひ残つてほしいつて。あ  
まりないことらしいよ」

「 自慢かよ」

「そう聞こえるかもね。でも、認められるつてのは

嬉しいことだよ。そうだろ?」

「 それは、わかる」

俺だつて、届け物を受け取つたヤツが嬉しそうな  
顔してるのは気分がいい。そりゃわかる。

けど、いかにも子供に教えてるみてえな、にこに  
こしたココの目は気に入らないけどな。

「とにかく、どうしても残つてほしいつて言われて  
ね。これはもう、正直に事情を話した方がいいだろ  
うと思つたんだ」

そう言つて、真つ直く見つめてくる目が澄んでるよ。

昔から真面目なやつだからなあ。きつと俺やくる  
み——ミルクのことも考えて、それでも言つたに決  
まつてる。

「 俺は、賛成だよ」

「 シロツブ?」

「理事長——店長を騙だますのは俺だつて好きじゃねえ  
し、店長のことだから、笑つて認めてくれる気もす  
るしな。

「だいたい、認めてもらえなかったら、みんなでパ  
ルミエ王国に帰りゃいいだけじゃないか。ミルクあ  
たり、お前と一緒に喜んで帰るぜ」

「賭けにしちゃいい勝負だよな。俺の知ってるなか  
で、あれだけ肝の太いやツなんて他にいねえもん。

「足元のゴミをちりとりに入れながら、俺は言っ  
てやった。」

「で、店長はなんて言ったんだ？」

「ああ。もう一時間くらいしたら理事長室に行くこ  
とになってる。」

「そこで決まるよ。来年どこで過ごすか、ね」

\*\*\*\*\*

「ほいつ、とー」

「かあるちゃんが飛ばしたドーナツ生地が、屋根の  
上の入り口に落ちてく。わたしはそれを見てから、ま  
た車の中に入った。」

「普段着のコートだけ脱いで、エプロンつけて。あ  
と三角巾で髪の毛つつめば出来上がり。」

「でも、鏡に映った姿を見たら、おもわず笑っちゃっ  
た。これじゃどうみたって、子供のお手伝いよね。」

「お。できたね、看板娘。さあて、それじゃちよい  
と、この学校の親分に挨拶してくるから。しばらく  
よろしくね」

「え？」

「車のとびらから、ひょいつ、と顔出したかあるちゃ  
んに言われて、わたしはすぐに言葉がでなかった。」

「なんだろう、ちょっとヘンな感じ。いつもと違う  
のは、手に分厚い封筒を持ってるくらいだけど  
そんなことじゃなくて。」

「ドーナツは生地がなくなるまで勝手にできてくる  
し、お代は まあいいや。チョコディップつきく  
らいなら、ひとり1コ配っちゃっていいから」

「い、いいの？」

「そう訊くのが精いっぱい。だってかあるちゃん、すっ

「ぐく早口で」

「なあに、あとで追加注文もらえばモトはとれるって。なにしろ、かおるちゃん特製ドーナツだからね。くは」

「ほんじゃ、行ってくるよ」

最後まで早口で出て行っっちゃった後ろ姿に、わたしはただ手を振るしかできなかった。

「緊張してみたい。かおるちゃん」

思わずこぼれた言葉に、自分でも驚いちゃったわ。

あのかおるちゃんが まさか、ね

\*\*\*\*\*

コンコン

理事長室の扉がノックされる音を、私は理事長席にかけてそのまま聞いていた。

チラっ、と時計を見る あいかわらず、時間に

厳しい人ね。

「どうぞ」

声をかけて、ドアから入ってきた人をみた途端、自分の顔がほころぶのがわかるわ。

「まあ、お久しぶり。かおるちゃん」

「どうも、来ましたよ」

ちよつとよれたシャツにジーンズなんてラフな姿だけれど、ピシッ、と伸ばした背中が服に似合っていない。

洋服じゃあ人間なかなか誤魔化ごまかせないものよね。

「待ってたわあ。さ、こちらに座って。大変だったでしょう？ でもこんなこと、かおるちゃんにしか頼めないから」

あら？

ドアの前からゆっくり私の前まで歩いてきたけれど、かおるちゃんは座らないで、そのまま私を見てるわ。なにかしら？

「その前に 理事長じゃなくて、おタカさんに訊

きたいんですがね」

いつもと違って、ちよつと硬い雰囲気ね。視線も真つ直ぐ私の目を見つめてるわ。それじゃ

「 あいよ。あたしになんの用だい? 」

学食での気持ちに自分を切り替えて声をかけたら、  
かおるちゃんが大きく息を吸って、ひとこと。

「おタ力さんは、信じますかね。別の世界から来た、つてヤツ」

\*\*\*\*\*

「ふう〜」

おもわず、おつきなため息ついちゃった。やっと、  
なんとか一息つけたわ。

かおるちゃんがいなくなつてから、もう大変だつ  
たんだもん。

確かにかおるちゃんの言つたとおり、ドーナツは勝

手に出来上がつてくるけど。それ以上に人がいっばい、いっばい、いっばい来ちゃつて。ひとりじゃ紙ナプキンに包んで渡すのもたいへん。最後はナプキンを自分で取つてもらつて、わたしはその上にドーナツ置いて回つたくらいだもん。お店のやることじゃないわ、これ。

でも、ひとり1コまでだから、とりあえずしばらくは来ないわね。わたしもひと休みしようかな

「店長が言つてたヘルプつて、おまえか? 」

え?

イスに腰掛けようとしてたところで、車の外から  
そう言われた。立ち上がつてみてみたら、

「あら、男の子? 」

女子校なのに男の子つて あ、さつきかおるちゃん  
んが言つてたのつて、この子なんだ。

「うまいのか、これ? 」

そっか、学食でバイトしてるつて言つてたつて。食



べ物が気になるんだなあ。

それに、

「へえ」

「な、なんだよ気持ち悪いな。チョコドーナツくれ」

いま、ちよつと後ろに下がったときの歩き方、ほんのほんの少しなんだけど、確かにそうだね。

「それじゃ。はい、これ」

わたし、ドーナツをそのままナフキンに包んで、男の子に渡したの。だって、

「あれ？オレ、チョコドーナツって言わなかったっけ？」

「あなたには、なにもかけないのがいいの。とりさ  
ん、だもんね♡」

ぶほつ、つて音。噴き出したのね。

「な、と、とりつて えっ!？」

ふふ。驚かせちゃった。

「んー わたし、獣医さん目指してるから。それ  
に、動物の音が聞こえるのよ」

首から下げてるキールンが感じてる。でも、本当にわたしたちと変わらないな。かおるちゃんから聞いてなかったら、疑いもしなかったもの。

「心配しないで。かおるちゃん この店長さん

だけど、かおるちゃんならこう言うわ。『ドーナツをおいしそうに食べるヤツに悪いのはいないよ』って

「単純」

「うん。すごく単純。いいでしょ♡」

とりさんに、にっこり笑ってあげたら、口ばくば

くしながら黙っちゃった。お水が必要かなあ。でも、ドーナツも、本当はあまりよくないんだけどな。

もつとお野菜とか」

そう、わたしが言いかけたら、

「だ、大丈夫ですっ！シロップはいつも、ホット  
ケーキがお給料がわりなんですからっ！」

明るい髪の女の子が、割り込んできた。

「え？う、うららら？なんでここに」

「今日は学食休みだっていうのに出ていったから」

なのにこんなところですよ!」

男の子の服、ぎゅっとつかんでそんなこと言ってるの見たら、なんだか見ちゃいけないとこにいる気がしてきちゃうな。

でも、それなら、

「あの一」

「なんですか!?!」

にらまないですよ。ああ、もう。この子の目は鷹ね。金色の鷹だと思って言わなくちゃ。獣医見習いとしては、ね。うん。

「ドーナツやホットケーキもいいけど、ちゃん

とお野菜も食べさせてあげなきゃダメよ」

「なんで、わたしに言っんですか?」

「違った?」

「 違いますん! いこ、シロップ!!」

「お、おい、ちよつと、引つ張るなよ!」

ふふつ。なんか、かわいいなあ。

袖を引つ張って歩いてく女の子を見てたら、つい

そう思っちゃう ても。

「かおるちゃんからは、わたしたちもこんな風に見えるのかな ?」

口に出したら、顔がだんだん熱くなってきた。

\*\*\*\*\*

「お、タカさんは、信じますかね。別の世界から来た、ってヤツ。

返答次第じゃあ、この封筒は渡せないんですがね」

真剣な視線が、真つ直ぐ私の瞳を貫いてきてる。

「依頼主を目の前にして、言つもんだねえ」

「オレは探偵でも興信所でもないんでね。中身は保証付きだけど、渡すかどうかはオレが決めさせてもらうよ。で、どうです?」

そうだね。かおるちゃんに、隠すこともない、か。

「普通の人と言つたんなら、あたしもバカバカしい話だと思うね。でも」

「でも?」

「でも、あの子が——小々田先生が言うのなら、本当じゃないかと思うね。笑われるかもしれないけど、あたしやそう思うよ」

言い切った自分に、私は心のなかで頷いた。心に嘘はついてないから。

そしたら、目の前のサングラスの中が、にやっ、と笑って、

「そんじゃ、とりあえずおタカさんに、これ。読み終わったら、理事長に渡しといてよ」

分厚い封筒が、私の前に差し出された。

封筒の中身は、十数枚のレポートと、お菓子の箱——『パルミエまんじゅう』とか書いてある。手土産のもりかね。チラっと見上げたら、サングラスのにやにや笑いが強くなってるよ。まあ、こういう人だからねえ。

さて、レポートは、と 『小々田氏とパルミエ王国に関するレポート』かい。

「ってことは、本当なんだね。やっぱり」

パラっ、とめくると、まずはパルミエ王国の概略。気候、産業 あら、地理がないわ?

「おっと!どこにあるかとかは言えないよ」

レポートから目上げると、かおるちゃんの手ひらがそこにあつた。 まあ、いいわ。

次に書いてあるのは、小々田先生のこと。本名はココで、王国の王子様。とあるトラブルにより、国民が囚われる事態発生。対応できる存在が日本にいることがわかり、避難を兼ねて来日、ね。その後トラブルの原因をやっつけて、いまは故郷に戻る状態、と。

「で、その原因をやっつけたのが」

ぱっとめくったその先に、文字がないわ。

「あら? ページが真っ白よ?」

「そいつはね、さすがに記録に残せないんだ。たえあんたが相手でもね」

まっすぐ見つめたかおるちゃんの視線がまた、突

き刺さってくるみたい。そう、なるほどね。

「うちの学生が関わってる、だね？ かおるちゃん  
んが守ってるのは、いつだって子供なんだから」

「さあねえ。それより、それ言わない代わりにひとつ答えますか」

おタカさんのとこでバイトしてる男の子、あの子も似たようなとこから来た子だよ」

一応、私のことを信じてくれたみたいだね。そうじゃないと、この人は子供のことは言わないから。

「ああ、やっぱりね」

「ん？ わかってた？」

私はすっかり頷いた。なんとなく、普通の子じゃないとは思ってたから。

でもね。

「さあ、それで？」

今度は、私がかおるちゃんの目を視線で突き刺した。私もあんたを信じてるんだけどね。

「あーあ、全部お見通しかねえ。はいはい。」

もうじき中等部卒業の美々野みみ野くろみちゃん、この子も同じだよ」

ははあ なるほどね。あのへんの子たち、か。

でも変だね。あのへんでいつも集まってる中のひとり

りは元生徒会長で、あの子は昔からこの土地の

「あ、へんなこと考えてるね？ 外から来たのは、いま言った子たちと、プラスひとりだけだよ。あとは

みんな、日本の子」

あ、あら。表情読まれちゃったわ。まあ、そうじゃなくちゃこんなこと頼めないものね。

「みんな、いい子だよ。バイトの男の子もさ」

「ああ。あたしのホットケーキ、本当にうまそうに食べてくれたからねえ あれは、悪くはなれない子だよ」

ん？ 妙に静かになっちゃったね。どうしたのかしら？

「できたらでいいんだけどさ、今の言葉、覚えとい

てよ。なにがあってもね」

「あつたりまえだろ、あたしや、学食のおタかさんだよー！」

ポんつ、とひとつお腹を叩いたら、かおるちゃん  
の口元が少し緩んだね。よしよし。

「悪かったよ。あんたあ、教育のプロだもんな。

その『プロ』に、ひとつお願いなんだけどね

\*\*\*\*\*

「ほらあれ、ドーナツの屋台。食べに行こ、のぞみ」

テラスから連れ出したけど、まだ沈んでる。いっ

たん沈むと回復遅いのねえ、のぞみは。

「ココさまのことだから、ちゃんと勝算があるのよ。

なんたって、わが国自慢の王子様ですから！

だからさ、ドーナツでも食べて あれ？」

ドーナツ屋台の前で、口元にゆび当ててじーっと  
見ている子。あの髪型は

「こまち!? なんでいるの?」

今日は高等部もお休みで、特に来る用事はないは  
ず。なんだけど。

振り返った姿は間違いないこまちだわ。あたした  
ちとドーナツを見比べながら、

「ええ。だって、新しいお菓子が来るって言うんだ  
もの。これは食べなくちゃ。ふふふ」

なんて。やっぱり研究熱心だわ。さすが『パルミ

エまんじゅう』考案者ね——って、ちよつと待つて

よ。こまちがらみで、聞き捨てならない噂があつた

気が あっ！

「聞いたわよ、こまち。ナツさまについてくとか

宣言したんだって?」

「そんな言い方してませんっ!!」

目の前に、真つ赤な顔が迫ってきたけど それ

はYesって言うてるのと同じじゃないかな。

自分でも、顔がにやにやしてるなあ、と思つたら、

こまちがぶいっ、て横向いて、

「そうじゃなくて ナッツさんがね、文学ならパ  
ルミエ王国の図書館にいいのが揃ってるから、機会  
があれば行ってみるといいよ、つて。それで」

はあ。その光景が眼に浮かぶわ。ナッツさまもす  
てきだけど素直じゃないから、またぶつきらばうな  
声で言ったんだろうなあ でも。

「だったら、パルミエ王国に住めばいいじゃない。こ  
まちならみんな歓迎するわよ」

「あたしは？」

は？

一瞬、なにが起きたのかわからなかった。聞こえ  
てきた声があたしのとよりから、つていうのに気づ  
いたのは、数秒たってから。

「のぞみ？」

「あたしは、歓迎されないかな？」

\*\*\*\*\*

「その『プロ』に、ひとつお願いんだけどね  
子供たちに旅させるつてのは、ダメかねえ？」

「子供 うちの学生？」

「そう。ダメかい」

変なこと言い出すわね。でも

「あつちの国の人と離れがたいつてこともあるらし  
いんだけどねえ あつちで真面目に勉強したいつ  
ても本気らしいんだよね」

さつきよりは柔らかいけど、やっぱり突き刺すよ  
うな視線だね。

「あたしや教育者だからね。ただ行かせるのには反  
対だね」

言いながら、私は考えてた。

ふゝむむむ 普通なら、できるわけないんだけ

どねえ。でも、かおるちゃんが言うのなら

ん？ だったら、いつそ！

「交換留学、なんてどうかね？」

「交換留学？」

「そう。こつちにも向こうの子供が来てるんだろ？  
なら、その子と交換。相手がいるんじゃない？あ、自分の  
勝手でサボりにくいしね。どう？」

あはは。心の中で、おタカさんの自分が理事長の  
自分と言いつ争ってるよ。ずいぶんと久しぶりだねえ。  
だけど、

「あきれたもんだねえ、正式に留学かい？うん

まあ、その方がこつちも細工しやすいかな」

「あらあら。顔が悪くなってるよ」

「あいにく、生れつきでね。げは」

うん。かおるちゃんのにこやかな顔で、理事長の  
自分も納得したわ。この人が『細工』してくれるな  
ら、きつと大丈夫。

「ん、ただ希望者がふたりいるんだよねえ。交  
換じゃあ数が合わないけど」

「うちのシロタも、留学することにすればいいよ。そ

れなら2対2だろ？」

一瞬、あたりが静かになったわ。

ふふ。かおるちゃんのびつくりした顔なんて、い  
つ以来かしらね。

「こりやまた、たまげた。女子校に男の子を入れる  
つもりかい？」

「もう入ってるじゃないか。学食で、毎日うちの  
女子学生たちと触れ合ってるんだからねえ。それに、  
1年以上見てて性質もわからないようじゃ、教育者  
失格だよ」

またひとつお腹をポンっ、と叩いたら、かおるちゃ  
んは頭を下げちゃった。

「へいへい。オレみたいなオジサンが心配すること  
じゃないやね。わかりました。ぐは」

\*\*\*\*\*

「あたしは、歓迎されないかな？」

のぞみの言葉を頭が理解するまで、しばらくかかった。けど――！

「ちょっと待ってよ。あんたも行きたいって？」

いい、こまちはいいのよ。かれんほどじゃないにしても頭はすっごくいいんだし、ちょっとくらい休学したって平気だもの。でもあんた、1ヶ月でもいなくなってみなさい。もつ谷底まで成績落ちるわよ!？」

「そんなことないわ!？」

え？ いまの、こまち？

「のぞみさんは、誰よりしっかりしてるわ。本気で行くつもりなら、帰ってきてても1点だって成績落とすわけない!？」

こまちが真面目な顔でそう言うのを、あたしはため息こらえながら聞いてた。――そんなの、わかっている、ってば。

「ココに聞いたんだよ。いま教師をやっているらるの、パルミエ王国で子供たちに教えていたことが

あったからだ、って。種族の違う子がいっぱいだから、ずいぶん鍛えられた、って。だから――！」

こまちの前に、大きなのぞみの顔が割り込んで、はぁ、なに言ってるんだか。許可するのは、あたしじゃないってのにさ。

でも 真剣にあたしに説明する姿を見て、ふっ、と思ったのよ。

ああ、あたしがのぞみこの子をお世話する日がくるのか  
もしれないな っ。って。

「はいはい、わかったわかった。あたしからも、ココさまに頼んでみるわ」

でも。

「そのかわり、ココさまはあたしとこっちに残ってもらおうわよ。いい?」

「えーっ!?!」

まだまだ、そんな気はありませんからね！



\*\*\*\*\*

「あんまね、騒ぎにたくないんだわ。今はさ」

私が封筒を返したとき、かおるちゃんがそう言っただわ。

「その国と付き合いがあるのは、この学校だけ。そんならオレでもなんとかできるからさ」

両方の肩を自分で叩いて、首をコキコキ言わせながら。

「今はそれでもいいかもね。でも」

「でも？」

「でもさ、あの子たちがおとなになって、自由に行き来するようになったら、それじゃ済まないんじゃないかねえ」

交換留学が、その道を開いちまうのかもしれない。ちよつとだけ、理事長の自分が説得しに出てきちゃってるみたいだよ。

「そんなときはまた、汗かけばいいでしょ。今度は、お

となになった子供たちにも協力してもらってね」

「なるほどね。よし！」

私は立ち上がって、まっすぐサングラスの顔を見た。

「かおるちゃん、これからその子たち、呼んでくれないかい？ あたしから話すよ。できるだけ、大人らしくね」

「子供の心を持った大人らしく、かね。ぐは

さてと。古いおじさんは退散するよ。もうすぐ若いのが来ちゃっからね、んじゃ」

あらあら、ちゃんと時計見ながら話してたのね。几帳面なんだから。

パタン、と閉じた扉から、すぐにコンコン、とノックの音が響いてきたわ。

「小々田先生ね。入って」

開いた扉からは、半分後ろを振り返りながらの若い先生。

「理事長先生、今の方は？」

いつも通り、ピシッとスーツを着てるのに、不思議そうに扉の方を見ているのが、妙に可笑しいわ。それじゃ、おタカさんから理事長に戻りましょうか。

「ドーナツ屋さんよ。私の古い友だちなの。——さて、それじゃ先日の続きを始めましょうか。」

\*\*\*\*\*

「ん」

思わず、変な声が出ちゃった。

屋台の前まで来ただけで、ドーナツのメニューをじーっと見てる女の子がいてさ、何も頼まないなんてへんな子だなあ、って思ってたなら、あとからふたりやってきて、屋台のまえで言い争ってるんだもん。

お客さんは来てないから、別にいいんだけどわたしはドーナツをナプキンで包んで手に持ったまま。どうしようかな、これ。

「よ、お揃いだね、お嬢ちゃんたち」

わたしが考えてたら、女の子たちの後ろから声が聞こえてきた。

「だ、だれ？」

3人も、びっくりしてるな。ふふ。思ったとおりね。

「かおるちゃん、遅いよお。もう、こっちは大変だったんだからっ！」

「悪い悪い　ってことでドーナツ屋の店長だけだね、理事長先生から伝言。夢野のぞみ嬢ちゃん、理事長が呼んでるよ」

「へ!？」

3人がぼかんとしてるのを、わたしもぼかんと見てた。

だって、

「ちよ、ちよつとのぞみ、なにやったのあんた!」

「いや　ぜんっぜん」

「ああ、ひとりじゃないんだ、美々野くるみ嬢ちゃ

んに秋元こまち嬢ちゃん。お嬢ちゃんたちも呼ばれてたから、一緒に行つてやっつてよ」

首をかしげながら、女の子たちが走っていくのを、わたしはまだぼかん、と見てた。

だつて、だつて、

「さて、と。それじゃ、お仕事再開しよつかね」

だつて、だつて、だつて！

「かおるちゃん！ なんであの子たちの名前知ってるの!？」

わたしが思わずどなつちやつたけど、かおるちゃんにはこつと笑つて、

「行きに言つた、男の子たちがらみだよ。オレにできることはやつたから。あとは、あの子たち次第かな」

「ふっ、ん　?」

動物の感じはしなかつたけど、でも、かおるちゃんには笑つた口でじつとわたしを見てる。これ以上は言わない気、みたい。

「さあさ、そんなことよりお仕事しなくちゃ。ほら、列ができちやつてるから、とりあえずジュースでも配つててよ」

え?　あ、本当だ。店長が戻ってくるの、みんな待つてたんだ。さつすが、かおるちゃんドーナツ。

よおし、それじゃ!

「わたし、がんばつちやつよ!」

\*\*\*\*\*

「き、緊張するね」

理事長室の前まで来たけど、そこで3人とも固まつちやつた。怖い人じゃないけど、ココのこともあるし

「ぐくぐくずずずしてもしょうがないわ、のぞみ。行くわよ!」

くるみがそう言つて、一歩前に出た。足がちよつと震えてるけど、やっぱり頼もしいな。

よあっし！

ゴン、ゴン

叩きすぎのノックに、笑い混じりの声が帰ってきた。

ふたりに目配せして、ゆっくり扉を開けたら

あれ？

「ココ　　っと、違った。小々田先生？」

今日はじめて会うココの顔。でも、ここ数日とち

がうよ。なんか、すっきりした顔で

「もうこの部屋でも、ココでいいよ。」

え!?

となりで、理事長先生も笑ってる——おタさんの顔で。

それじゃ！

「さあ、みなさん、聞かせてもらいますよ。素直な希望を、ね」

\*\*\*\*\*

「お皿、しまった？」

「うん。全部固定したよ。」

ドーナツ生地が全部なくなつたのは、もう夕方近く。いっぱいお客さん来てくれたな。みんな喜んで食べてくれて　かおるちゃんがドーナツ屋さんやってるの、ちよっとわかる気がするな。

「よあし、そんなじゃ助手席乗って。あとはやるから、オレ」

ぱたん、と閉めた扉の先に、女の子たちが歩いているのが見えた。

「あれ？　あの子たしか、かおるちゃんが伝言つたえてた子、だよな？」

窓ガラスを開けて、様子を見てみたら、声も聞こえてきたわ。

ゆっくり車に近づいてて、小さい声まで聞こえてるっていうのに、気にしてないみたい。

「ご両親、説得できる、のぞみさん?」

少し背の高い、制服の違う女の子がそう言うつと、

「うん。多分」

子犬の耳みたいな髪の子が、そう答えてた。ちよつ

と沈んでるけど、さつきより軽い感じね。

「いつしよに行きましょう。その方がいいわ」

「かれんだつたら説得力あるんだけどなあ。こまち

じゃ　っ!　いたたたたたたっ!!」

「くるみ!　もつ。ありがと、こまちさん」

子犬髪の子がとなりの子のほつべたを引っ張つた

と思つたら、みんなで笑つてる。仲いいなあ、ふふ。

「ふう。それじゃあとは　どーやってシロップを

巻き込むか、だよねえ」

「あ、それあたしやるわ」

「くるみ?」

「事情はココさまが話して下さるみたいだし、あと

は、ん　　やっぱり味方がいるわね。

あ。おーい、うちらっ!」

手を振つてる向こう側から、さつきとりさんと一緒

にいた、明るい髪の子が走つてきた　と、思つ

たら、その姿がゆっくり遠くなつていく。

車が、バックし始めたんだわ。

「あとは、あの子たちにまかせよつかね。はは、やつ

ぱ自分の領分の外に手え出すと疲れるねえ」

笑いながら首を鳴らしてるかおるちゃんが、大き

く息をはいて、

「でも、ま、これでこつちはおしまい。あとは　」

「え!」

顔をあげて見てみたけど、かおるちゃんは平気な

顔で運転中。あれ?

わたしの、気のせいかな?　——いま、わたしたち

の名前が聞こえた気がしたんだけど

——おしまい——